

『つながる世界』～知ろう考えよう、世界と日本のこと～

2017年7月 国際交流・図書

夏休みが近づいてきました。海外旅行やホームステイを予定している人もいます。旅の前後にその国に関連した本を読んでみることをおすすめします。経験の幅が少し広がるはずです。海外に出掛ける予定のない人も、本を通じて未知の国を旅してみませんか。あなたの読んだ本が、未来の旅へとつながるかもしれません。

さて、今年も **JICA（国際協力機構）主催のエッセイコンテスト**の募集が始まっています。テーマは「世界の人々と共に生きるために～私たちの考えること、出来ること～」です。原稿用紙4枚以内で9月11日が締切です。小論文の練習として書いてみませんか。副賞には海外研修もあります。応募用紙は学校で手に入るほか、JICAのホームページからもダウンロードできます。（詳しくは武田まで）



日本で生きている多様な人々 ～共に生きることのヒントになる本～

『R. S. ヴィラセニョール』（乙川優三郎 新潮社 2017年）

日本にはフィリピンにルーツを持つ人々が暮らしている。この小説の主人公もそうした人間の一人。彼女は伝統的な日本の染色の世界で生きようとするのだが…。

『となりのイスラム 世界の3人に1人がイスラム教徒になる時代』（内藤正典 ミシマ社 2016年）

イメージだけでよくわからないイスラム。日本でも聞くハラール食品を扱う「ハラール・ビジネス」に違和感を覚えるという著者が、わかりやすくイスラムを解説。

『ナグネ 中国朝鮮族の友と日本』（最相葉月 岩波新書 2015年）

電車の行き先を聞かれたことで知り合った中国朝鮮族の女性と著者との16年の歴史。ナグネとは旅人のこと。この本を通じて著者と一緒に国や民族を越えた旅を。

『アーサーの言の葉食堂』（アーサー・ピナード 株式会社アルク 2013年）

日本で25年以上暮らすアメリカ人の詩人が、気になった日本語から日本社会を少し辛口に分析。さて日本のどんな部分が外国人には気になるのだろう。

『やさしい日本語 多文化共生社会へ』（庵功雄 岩波新書 2016年）

津山にも外国人のための日本語教室がある。地域で暮らす外国人にとって必要な日本語を考えることから、私たちにとっての「やさしい日本語」も考える一冊。

日本にいながら海外を味わう ～暮らす人、旅する人の視点で味わう本～

『インド探訪』（タゴール暎子 論創者 2015年）

タゴール家（知っている人はかなり物知り）に嫁いだ著者。日本では問題の大麻がインドでは「スィディ」と呼ばれ、デザートに混ぜて食べられている？

『ダーリンは外国人 まるっとベルリン3年め』（小栗左多里&トニー・ラズロ KADOKAWA 2016年）

ベルリンは行ってみたい街、住んでみたい街として人気がある。で、実際に住んでみるとどうなのだろう。漫画家でもある著者がおもしろくベルリン生活を描く。

『ユーコン川を筏で下る』（野田知佑 小学館 2016年）

野田知佑といえばアウトドアがブームだった時代、カヌーに愛犬を乗せて日本各地の川を下っていた姿が目につく。年をとった野田さんの旅もまた味わい深い。

『シベリア最深紀行』（中村逸郎 岩波書店 2016年）

ロシアの大部分を占めるシベリア。モスクワから遠く離れた辺境の地で暮らすのは民族も宗教も様々な人々。未開のアマゾンに分け入るようなけっこうディープな旅。

『ロシア日記』（高山なおみ 新潮社 2016年）

同じロシアでもこちらはシベリア鉄道による、ウラジオストクからイルクーツクまでの旅。「つながる世界（4月号）」で紹介した『ウズベキスタン日記』の姉妹編。

『ルポ難民追跡』（坂口裕彦 岩波新書 2016年）

2年前からシリア難民のヨーロッパへの移動が続いている。そんな難民の密着取材を試みる著者が、ある家族をギリシャからドイツまで追跡する奇跡の旅。

『デトロイト美術館の奇跡』（原田マハ 新潮社 2016年）

ハードな旅が続いた後は、アメリカ、デトロイトの市立美術館でひと休みしよう。一枚の絵の前で「ここを訪れる人々の人生の物語」に耳を傾けるのも悪くない。

『私の台湾・東海岸』（一青妙 新潮社 2016年）

台湾人を父に持つ一青妙は、シンガーソングライターの一青窈の姉。岡山空港から直行便もある台湾。東海岸はかつて日本人が多く住んだ地域で歴史を感じさせる。

《お知らせ》

「つながる世界」で紹介した本は、本校の図書室で順次購入しています。また、津山市立図書館（アルネ）で借りることもできます。夏休みには是非、本を読んで世界を広げましょう。

